

古くて最先端のものづくり、 グリーンウッドワーク

岐阜県立森林文化アカデミー

講師 久津輪 雅

岐阜県立森林文化アカデミーの「ものづくり研究会」は、木工のつくる技術と伝える技術を学ぶ、2年制の学科です。近年、木工の分野では、工場で家具を量産するスタイルに加えて、小さな工房で一人ひとりの顧客の要望に応えるものづくりが求められるようになりました。また、「木育」と呼ばれる、子どもの頃から木と触れ合い、豊かな暮らしや環境づくりをめざす活動にも、木工技術者の活躍の場が広がっています。こうした分野の人材を育成するため、森林文化アカデミーではそれぞれ異なる専門技術を持つ3人の教員が、実践的な教育を行っています。

私が力を入れているのは「グリーンウッドワーク」と呼ばれる、人力の道具を使って生の木を割り、削って、小物や家具をつくる木工です(写真1)。



▲写真1 グリーンウッドワーク

木工と言えば、機械や電動工具を使い、きちんと乾燥させた材を用いるのが常識なので、なぜ人力?なぜ生木?と思われる方もたくさんいらっしゃるでしょう。しかし、木工がいまの姿になったのはつい最近のこと。19世紀の終わり頃まで、日本では木地師と呼ばれる人たちが人力のろくろを持って山から山へと渡り歩き、伐り倒したばかりの生木を削ってお椀をつくっていました。西洋でも、森の中で足踏みろくろで生木を挽いて丸棒をつくり、それらを組み立てて椅子にしていたのです。人力で木を加工するなら、やわらかい生木のほうがずっと楽です。そして生木は乾くと縮むという欠点も逆に利用して、乾くほど接合部分を締め付け、強くなるように工夫されているのです。英語で生木のことをグリーンウッドというために、この木工はグリーンウッドワークと呼ばれます。

私はイギリスでこの木工と出会いました。当然、産業としての役割は終えていましたが、環境に優しい「グリーンな」木工として、見直されていたのです。私も、これは一般の人たちの趣味のものづくりや子どもたちへの木育活動など、木の良さ、ものづくりの楽しさを知ってもらうには最適の技術だと思いました。間伐材や里山の手入れで出た小径木など、どんな木も材料になる、刃物が高速で回らないから危なくない、エネルギーを使わないのでどこでもできるなど、今の時代に合うさまざまなメリットがあるのです。

グリーンウッドワークには、斧や銃(せん)と呼ばれる刃物類、そして削り馬(写真2)や足踏みろくろのような、木製の人力の道具を使います。森林文化アカデミーのも



▲写真2 削り馬

のは、西洋で使われていた道具をもとにしたオリジナルデザインで、岐阜県産のヒノキでつくられています。森林文化アカデミーでは、このグリーンウッドワークを実習に取り入れています。学生たちが自ら伐採してきたヒノキの間伐材で箸をつくったり、リュウブなどの里山の木で子ども向けに木の指輪づくりの講座を実施したり、クリやナラの丸太から椅子をつくったりしてきました。写真3は、学生がつくった椅子です。すべて人力とは思えないほど美しいでしょう?軽くて座り心地も上々です。学生たちには、この人力の木工が新鮮に映るようです。木を割ると、幹のねじれに沿って割れたり、節を回り込むように割れるので、その木がどう育ってきたかが分かります。機械で切ったのでは知る

ことのできない木の特性です。また、乾燥後は堅くて加工がやっかいな木も、生ではサクサク削れるので、その楽しさに夢中になる学生も少なくありません。

グリーンウッドワークの楽しさをさらに多くの人に広めようと、去年、森林文化アカデミーの卒業生や在校生、生涯学習講座の受講者たちが中心となって「NPO法人グリーンウッドワーク協会」を設立しました。美濃市で会員向けに毎月研修会を開いているほか、全国各地の自然学校などへ出前講座にも出かけています。その地域の里山を手入れして、その材料でスプーンを作るのがいちばんの人気プログラムです。

私は、森林文化アカデミーが蒔いた種が、NPOの活動として育ち、いずれは岐阜県に新しい木のものづくりの文化として根付いてくれることを期待しています。たとえば地域の子どものためにお母さんたちが集まってスプーンをつくったり、若い人たちがお年寄りたちのために椅子をつくる、そんな活動だって可能です。地域の人たちが自ら、地域の森から出た材料を使い、その地域に必要な物をつくる。少し前までは、当たり前のように行われていたことなのかも知れません。それを今の時代に合う新しい形で可能にするのが、グリーンウッドワークという技術であり、NPOという社会の仕組みなのだと思います。グリーンウッドワークを見てみたい、体験してみたいと思う方、ぜひ森林文化アカデミー・久津輪までご連絡ください。楽しいですよ。



▲写真3 椅子